



1976-1982

文武両道！頂点を目指して



引退試合に全員集合して。

県下強豪に名連ねる

週3日の練習、しかも土曜日以外は、3:30から5:00までの1時間半の短い練習時間。それが我々サッカー部に課せられた練習であった。プラス佃先生のナチス、ヒットラー以上の独裁政治。文武両道を基本として、学校のクラブ活動としては最高の環境の下で、六甲サッカー部の伝統を受け継ぎながら、我々は、頂点を目指して頑張っていた。

高校2年になって、39期は40期とチームを組み神戸市の新人戦に臨んだ。それまで、ほとんど成績らしい成績を

残したことがなかった我々であったが、チームにまとまりが出来、チーム力も向上し、順調に勝ち進んだ。準々決勝、準決勝と勝ち上がり、遂に決勝に勝ち進んだ。相手は、現在、ガンバ大阪のキャプテン、永島を擁する御影工業。場所は、神戸中央球技場。初の芝生のグラウンドでの試合であった。我々は、決勝というだけで、既に舞い上がっていた。決勝1週間前、佃先生は、我々に、奇策を命じた。あえてフォーメーションを崩し、ツートップの布陣を敷いた。守りを固めて、少ないチャンスを得点に結び付けようとした。当時、御影工業は、県でも断トツのトップ校であった。決勝が始まり、

六甲は、PKで先取点を挙げた。勝てるぞという雰囲気が高まったものの、実力の差は歴然としており、その後、守勢一方になり、遂に同点ゴール、逆点ゴールを許し、その後再三、相手ゴールを襲うもゴールを割れず、1-2で準優勝に留まった。しかし、この試合を経て、我々は、自信をつけた。

神戸市2位という実績を引っ提げて、我々は、兵庫県の新入戦（兼、近畿大会予選）に進んだ。上位5校が、近畿大会出場権を得る。六甲は、何年ぶりの近畿大会出場に燃えていた。当時の新聞に、兵庫大会の予想記事がのった。優勝候補は、御影工業、そして対抗に六甲の名があった。神戸大会



引退試合で得点をあげる。

での、対御影工業戦の善戦ぶりが、評価されていた。我々は、知らず知らずのうちに、六甲は強いという錯覚に陥っていた。

県予選を迎えた。チーム状態は、良くなかった。どこかに慢心があった。相手に対する闘争心がなく、受け身であった。なんとか、初戦を突破し、ベスト8に進出した。県立宝塚高戦、勝てば、近畿大会出場決定である。しかし、押し気味に試合を進めるものの、ついに、相手ゴールを割れず、0-0でPK戦にもつれこんだ。結局PK戦に敗れ、六甲は、残る1校の座をめざして、敗者復活に回った。県立西宮高戦、六甲は、押しまくった。闘志が、空回りしたのか、決定的なチャンスを何度も迎えながらも結局ゴールを割る事ができず、またもPK戦で涙を飲んだ。残念ながら、何年ぶりかの、近畿大会出場のチャンスを逃したものの、神戸市大会準優勝、県大会ベスト8進

出と、着実に六甲は、兵庫県の強豪の一つとしてその名を轟かせた。その後、40期、41期が、神戸市を制し、遂には兵庫県をも制し、六甲サッカー部は、再び兵庫県の頂点に立つことになった。

50周年の記念誌の発行にあたり、六甲サッカー部の伝統を受け継ぐことのできた幸せと、歴史に感謝したい気持ちで一杯である。益々、六甲サッカー部の発展を祈願し、文武両道の精神のもと、六甲サッカー部が全国大会で活躍する姿を夢見ている。OBの皆様、後輩の皆様、六甲サッカー部の一員としての誇りを胸に、今後の活躍を祈ります。

[中野 操]